

北朝鮮のミサイル発射と南北閣僚級会談

—北朝鮮の核とミサイル(5)—

澤 喜司郎

はじめに

北朝鮮がミサイルを発射した直後に韓国釜山市で開催された第19回南北閣僚級会談について、日本経済新聞社編『北朝鮮クライシス』(2006年)は「国内外の世論を背景に、北朝鮮のミサイル発射問題を集中的に取り上げた韓国に北朝鮮は猛反発。危機をあおって譲歩を迫る『瀬戸際戦術』を韓国に対しても行使してみせた。ミサイル発射が『主権国家の権利』であり『正常な軍事訓練の一環』だとする従来の主張から一步も歩み寄らず、協議続行を求める韓国に打ち切りを通告。11日に始まった会談は、予定した最終日を迎える前に決裂、終了した」としている。

確かに、南北閣僚級会談は7月11日の歓迎晩餐会から始まり、予定した最終日を迎える前に決裂し終了したが、これは韓国側からの評価であり、北朝鮮側は会談にやって来た目的を達成したのである。北朝鮮側代表団が「最終日を迎える前に予定通りに帰国した」のは、「北朝鮮との会談」と「国際社会での面子」という二股をかけた盧武鉉大統領の「アマチュア外交」と、北朝鮮に「ミサイル発射の謝罪に來い」と要求した「韓国人の自惚れと驕り」に対する北朝鮮の警告であり、その警告を青瓦台は「意味ある会談だった」と素直に受け入れ、謝罪を表明したのである。そして、北朝鮮の忠実な下僕である盧武鉉大統領に対する北朝鮮の最大の贈り物が2006年10月の核実験、それに2007年10月の南北首脳会談と「南北関係発展と平和繁栄のための宣言」(南北首脳宣言)であったのである。

本稿では、北朝鮮のミサイル発射に関する国連安全保障理事会での制裁決

議案が議論されている中で開催された第19回南北閣僚級会談を、盧武鉉大統領の「アマチュア外交」と「韓国人の自惚れと驕り」という観点から若干の分析を試みたい。

I 南北閣僚級会談の開催を決めた盧武鉉大統領の素人外交

(1) 南北閣僚級会談の開催を決定した韓国政府

北朝鮮のミサイル発射に対して国連安全保障理事会が対北朝鮮制裁決議案について検討を始めているにもかかわらず、06年7月7日に韓国統一部は南北閣僚級会談を予定通り7月11日から14日までの4日間の日程で釜山で開催することを明らかにし、韓国政府高官も「南北対話の中断は望ましくない」と、北朝鮮との閣僚級会談を行う意向を表明した。しかし、韓国政府当局者は7月9日に「12日の全体初会議基調演説を通じて我々は北朝鮮ミサイル発射問題を強く非難し、6か国協議復帰を促す」「今回の会談でコメの提供や経済協力問題は扱わない」「我々が北朝鮮ミサイルと6か国協議復帰問題を核心議題とすることを明らかにしたため、あとは北朝鮮にかかっている」「我々が先に南北対話を絶つことはない」が、「北朝鮮側が閣僚級会談に来ないことも政府は十分に勘案している」と述べ、北朝鮮が南北閣僚級会談に出席しない可能性を示唆した。韓国政府が北朝鮮の会談欠席の可能性に言及するのは異例のことで、そのため「ミサイル発射を非難し、6か国協議への復帰を求めるという韓国側の立場に北朝鮮側には気に障る部分があったのだろう」「韓国政府が週末に北朝鮮との会談準備過程で『会談欠席』の雰囲気を感じたのではないか」との憶測が流れていた(「中央日報」06年7月10日10時15分)。

この「気に障る部分」とは、韓国政府が「我々は北朝鮮ミサイル発射問題を強く非難し、6か国協議復帰を促す」「今回の会談でコメの提供や経済協力問題は扱わない」と表明したことであり、それは「南北閣僚級会談を中止せよ」という内外からの批判を意識したものだが、北朝鮮にとっては「ミサイル発射の謝罪に來い」と要求されたことになり、そのため北朝鮮側が欠席す

ると思い、「北朝鮮側が閣僚級会談に来ないことも政府は十分に勘案している」と述べたのであろう。北朝鮮に対して「ミサイル発射の謝罪に來い」と要求する韓国の傲慢で驕った態度は、韓国が北朝鮮を「幼い弟」と思っているからであるが、現実の国際社会ではミサイルで中国を恫喝している北朝鮮にとっては韓国こそが「幼い弟」であるにもかかわらず、北朝鮮を「幼い弟」扱いする「韓国人の自惚れ」と、「北朝鮮との会談」と「国際社会での面子」という二股をかけた盧武鉉大統領の浅知恵が韓国側にとっては会談決裂という結果を招くことになるのである。

なお、北朝鮮が閣僚級会談に出席するのであれば、権虎雄内閣責任参事をはじめ、朱東賛民族経済協力委員会副委員長、朴鎮植内閣参事、祖国平和統一委員会書記局部長ら北朝鮮側代表団は11日午後平壤を出発し、直行便を利用し金海空港入りする。韓国側は統一部の李鍾奭長官を首席代表に、財政経済部の朴炳元第一次官、文化観光部の劉震竜次官、統一部の李寛世政策弘報管理室長、統一部局長らが出席する。

通常、南北閣僚級会談は初日には簡単な歓談と歓迎晩餐会を行い、2日目には全体会議と遺跡など観光地の見学、首席と代表の会談、3日目に共同報道文案協議などを経て最終日に終結会議を行い、共同報道文を発表する形で進められる。しかし、今回の会談は韓国側が北朝鮮側に「ミサイル発射の謝罪に來い」と要求している状況にあるため、一部の日程が変更される可能性もあるといわれていた。また「韓国側代表団は北朝鮮側に対し、ミサイル発射の謝罪と6か国協議への早期復帰を強く求める方針だが、北朝鮮がこれに従順に応じる可能性はほとんどない。そのため舌戦ばかりが続き共同報道文も作成できないという最悪の状況になる可能性もぬぐいきれないと、政府はみている。双方が次期会談の日程を決め、対話のモメンタムを続けるだけでも成功だとの見方も出ている」(「YONHAP NEWS」06年7月10日11時17分更新)と報じられていた。

(2) 「幼い弟」を擁護する「韓国人の自惚れ」

青瓦台の宋旻淳統一外交安保政策室長は7月10日のMBCのラジオ番組で、南北閣僚級会談では「これまでは経済協力を話し合ってきたが、今回はこうした問題を話し合う場にはできない」「ミサイルと6か国協議問題に対して韓国側が納得できる説明が先だ」「肥料と食糧などに対する協議は留保する」との考えを示したが、他方で「北朝鮮のミサイル発射は度が過ぎた挑発的な側面もあるが、政治的背景も考慮すべきだ」「韓日米が取る措置は性格や内容が異なり、直面する状況も異なる」「北朝鮮の挑発的な行為には応分の措置が必要だが、それよりも根本的な問題の解決に向け、外交的で建設的な措置を並行すべきだ」と述べ、北朝鮮に「ミサイル発射の謝罪に來い」と要求しているわけではないと強調していた。しかし、韓国側の謝罪要求に北朝鮮側が怒り、南北閣僚級会談に出席しない可能性があるため、宋旻淳統一外交安保政策室長は「現時点では閣僚級会談は予定どおり11日から開催されるものとみなしているが、南北関係では日程が最後の段階で変動することもあるため必ず開かれるとは言い難い」(「YONHAP NEWS」06年7月10日11時29分更新)と、韓国側の面子を守るために会談が中止になった場合の責任を北朝鮮側に転嫁していたのである。

また、韓国の韓明淑首相は7月10日に、南北閣僚級会談で自身が歓迎晩餐会を主催することを取り止め、代わりに李鍾奭統一部長官が主催することを明らかにした。北朝鮮のミサイル発射を受けて南北閣僚級会談を予定どおり開催することに韓国世論の賛否が分かれているため、歓迎晩餐会の主催者を「格下げ」することで北朝鮮に厳しい雰囲気伝える狙いがあるとみられていたが、韓国政府内には「冷遇されると分かっていたら、北朝鮮が当日にキャンセルする可能性もある」(外交通商部当局者)と囁かれていた(「毎日新聞」06年7月11日0時48分更新)。

一方、韓国外交通商部の李揆亨第二次官は7月10日に日本の大島正太郎駐韓大使を外交通商部に呼び、国連安全保障理事会に米国・日本・英国・フランスなど7か国が提出した北朝鮮に対する制裁決議案について「北朝鮮への

メッセージは段階的に進めるべきで、あまりに一方的に決議案を推進することは望ましくない」と対北朝鮮制裁決議案に反対の立場を伝え、これに先立ち外交通商部の秋圭昊報道官は「韓国は日本と行動を共にすることはないだろう」「我々は中国が拒否権を行使してくれることを期待する」と制裁決議案に反対の意向を露骨に明言していた。

韓国政府は、これまでも国連人権委員会での北朝鮮の人権状況に関する非難決議案の採決に欠席したり棄権したりしてきたが、韓国政府がこのような立場を明らかにしたのは青瓦台が北朝鮮のミサイル発射を安全保障上の脅威ではなく「政治的な事件」と規定し、南北閣僚級会談を予定どおり開催する考えを示すなど「静かな対応」をしている中で、この制裁決議案に韓国が賛成すればムードを壊しかねないばかりか、制裁決議案が北朝鮮を刺激する恐れがあると考えていたからだといわれていた（「朝鮮日報」06年7月11日7時55分）。また、韓国政府は対北制裁決議案がそのまま採択された場合、金剛山観光や開城工業団地事業などの南北経済協力や韓国政府の対北支援が制裁対象になる可能性があると判断し、対北朝鮮制裁決議案に反対の立場を明らかにしたとも報じられていた（「朝鮮日報」06年7月11日9時3分）。いずれにしても、対北朝鮮制裁決議案に関する韓国側のこうした一連の発言は、北朝鮮側には北朝鮮をますます「幼い弟」扱いしているようにと映ったに違いない。

II 南北閣僚級会談の開催と韓国の誤算

(1) 北朝鮮側代表団の到着と歓迎晩餐会

韓国側が、南北閣僚級会談では経済協力懸案は扱わず北朝鮮のミサイル発射と6か国協議復帰問題を議題とする方針を示し、国際社会を意識して北朝鮮に「ミサイル発射の謝罪に來い」と要求していたことから、北朝鮮側が会談に出席するかどうかが目されていた。7月10日午後の時点では北朝鮮側からは欠席するとの連絡はなく、同会談は予定どおり開催されることになり、そのため韓国側は「ミサイル発射の謝罪に來い」という要求を北朝鮮側が承

諾したものと勘違いしたのであるが、それこそが「韓国人の自惚れ」によるものであった。7月11日午後4時すぎに北朝鮮代表団29人は高麗航空の特別機で金海空港に到着し、代表団の権虎雄内閣責任参事は航空機のタラップの下で空港職員から花束を手渡された時も、空港で出迎えた韓国財政経済部の朴炳元次官と握手した時も表情は硬いまま、そのため「南北関係が冷え込んでいるときでも空港では双方とも笑みを見せる場合が多かったことから、この日の雰囲気は会談の見通しがそれほど明るくないことを暗示している」といわれていた(「YONHAP NEWS」06年7月11日18時52分更新)。

北朝鮮側代表団は金海空港から釜山市海雲台のホテルに移動し、出迎えた韓国統一部の李鍾奭長官はホテルでの歓談で台風の話題を持ち出し「台風により人命被害があった」と話すと、権虎雄内閣責任参事は「特に被害はなかった」「台風というものは北や南にだけ被害を与えるものではなく、北が被害を受ければ南も被害を受ける。災難は外部からも来る。我々はうまく外部からの災難に対処し防ぐ必要がある」と、台風をミサイル発射問題での日米による北朝鮮への圧力に例えて南北共助が必要だと強調した。産経新聞は、この権虎雄内閣責任参事の発言は「日米などがミサイル発射問題で圧力を強めていることを念頭に置いた発言とみられ、会談を通じ韓国の取り込みを図る狙いがありそうだ」(「産経新聞」06年7月11日22時22分)とし、毎日新聞は「韓国と日米との間にクサビを打ち込もうという狙いだ」(「毎日新聞」06年7月12日1時33分更新)と報じていた。権虎雄内閣責任参事の発言に対し、李鍾奭長官は「天候のように情勢と状況が暗いこういう時に、南北が討論して対応していこう。南北の住民が熱望する平和安全についてよい話し合いがあることを望む」と応えたというが、「北が被害を受ければ南も被害を受ける」という権虎雄内閣責任参事の言葉の本当の意味を理解していなかったにちがいない。

そして、同夜の歓迎晩餐会で4日間の日程の南北閣僚級会談が公式に始まり、李鍾奭長官は「最近起きた状況のために地域の情勢が不安定になっており、南北関係も影響を受けている。困難な状況であるほど真摯な対話を通じ

て打開策を設けていきたい」と間接的な表現で北朝鮮によるミサイル発射問題に憂慮を表明した。この李鍾奭長官の発言は「韓国側はミサイル発射と6か国協議再開問題を主要議題とし、発射の責任を問い、強い遺憾の意も伝え…同時に6か国協議復帰を求め、同協議非公式会合への参加を促し緊張緩和につなげたい」(「産経新聞」06年7月11日22時22分)からといわれていたが、それは韓国は「兄」として「幼い弟」に説教し、国際社会に「兄」の責任を果たしたことをアピールしようとするものであった。これに対し、権虎雄内閣責任参事は「南北双方は情勢がどう変わっても環境がどう変わっても、この軌道から絶対脱線せずに我々民族が選択した六・一五南北共同宣言の道を最後まで進むべきだ。北側代表団は会談の成果の保障のため、すべての誠意と努力を尽くす」と、韓国が「ミサイル発射の謝罪に來い」と要求したことと、北朝鮮を「幼い弟」扱いする韓国側の自惚れと驕りを批判したが、北朝鮮側のこの真意を理解できなかった李鍾奭長官は「情勢が芳しくなく苦しい状況だが、こんな時こそ南北による賢明な話し合いで対処していこう」と応じていた。

また、権虎雄内閣責任参事が歓迎晩餐会の席で李鍾奭長官に「雨が降ろうが、雪が降ろうが、進むべき道であるためここまでやってきた」と発言したと報じられていたが(「朝鮮日報」06年7月12日13時56分)、韓国側の誰一人としてこの言葉の意味を理解できていなかったのである。

(2) 北朝鮮側が韓国側に発した警告

南北閣僚級会談2日目の12日午前には全体会議が行われ、李鍾奭長官は基調演説で韓国の度重なる警告にもかかわらず北朝鮮がミサイルを発射したことに強い遺憾の意を表し、北朝鮮が米国の金融制裁に反発して2005年11月以来ボイコットしている核問題をめぐる6か国協議への早期復帰を求め、また「ミサイルの追加発射が行われれば、事態は取り返しのつかない方向に悪化するとして追加発射を中断するよう呼びかけた。特に、韓国と北朝鮮は6か国協議を通じ核問題の解決と同時に南北共同繁栄に向けた新たなターニング

ポイントを見出すべきと強調した」(「YONHAP NEWS」06年7月12日16時28分更新)という。

一方、権虎雄内閣責任参事は基調演説で「情勢の変化に左右されず南北共同宣言の履行に向け情勢を脅かす諸要因を取り除いていくことを提案し…さらに、朝鮮半島での戦争を防止し平和を保障するためには南北共同宣言7周年目になる来年から韓国は外国との合同軍事演習を完全に中止すべきと主張した。合わせて、同胞愛や人道的な協力を一段と発展させようと主張し、コメ50万トンと軽工業原材料の支援を要請するとともに、秋夕(旧盆)を機に金剛山で離散家族の再会やテレビ面談を開催するよう提案し」(「YONHAP NEWS」06年7月12日16時28分更新)、また「相手側の体制と尊厳性を象徴する聖地や参観地を制限なく訪問できるようにすべきと主張し、8月15日の光復節(植民地からの開放)に韓国側当局の代表団が平壤を訪問することを提案した」(「YONHAP NEWS」06年7月12日13時43分更新)が、ミサイル発射問題と6か国協議復帰問題にはまったく触れなかった。

李鍾奭長官は北朝鮮が「ミサイル発射の謝罪に来た」と思い込んでいたため、北朝鮮側がミサイル発射問題と6か国協議復帰問題に言及しなかったことに反発し、基調演説後の討議でミサイル発射問題を提起したが、権虎雄内閣責任参事は7月6日の外交部報道官発言を引用して「通常の軍事訓練の一環であり、主権国家の正当な権利だ」とするこれまでの公式な主張を繰り返すにとどまった。また、権虎雄内閣責任参事が基調演説の中で「『先軍政治』は南側の安全を図るものだ。南側の広範囲の大众が先軍の恩を受けている」と述べたことに対して、李鍾奭長官は「韓国側の誰が貴側に安全を守ってくれと言ったことがあるのか。韓国国民の中で先軍が韓国の安全を守っていると言う者はおらず、要求した者もない」「北朝鮮側がミサイルを発射せず核を開発しないことが、本当に韓国の安全に役立ち守ることだ。北朝鮮側がミサイルを発射すれば、その射程距離だけ南北の距離も遠くなる」「今後このような問題提起をしないよう正式に求める」と反論するなど激しい議論が巻き起こった(「東亜日報」06年7月13日3時0分)。

東亜日報は権虎雄内閣責任参事の「『先軍政治』は南側の安全を凶るものだ。南側の広範囲の大衆が先軍の恩を受けている」という「先軍政治恩徳論」発言について「北朝鮮側がこれまでの南北対話で先軍政治を言及したことはあるが、『先軍政治が韓国の安全を守る』という論理を述べたのは初めてだ」(「東亜日報」06年7月13日3時0分)とし、中央日報は「これは北朝鮮が2002年10月、第2次北核危機以後、南北会談で『北の核の傘により南側も米国の朝鮮半島核戦争の危険を免れている』と主張したのと同じだ」(「中央日報」06年7月13日9時53分)と報じていた。

権虎雄内閣責任参事の「先軍政治恩徳論」発言は北朝鮮を出発する前に周到に準備されていたものであり、この発言は「北の核の傘により南側も米国の朝鮮半島核戦争の危険を免れている」ことを韓国側が忘れて北朝鮮を「幼い弟」と思い込み、弟に「ミサイル発射の謝罪に來い」と要求したことに対して、「我々は幼い弟ではない。核保有国だ」「韓国こそ幼い弟だ」「幼い弟が我々に指図するな」という警告であったのである。歓迎晩餐会の席で権虎雄内閣責任参事が「雨が降ろうが、雪が降ろうが、進むべき道であるためここまでやってきた」と語ったのは、「『生意気な弟』(韓国)に警告するためにやって来たのだ」ということを意味していたのであった。なお、北朝鮮の「我々は幼い弟ではない。核保有国だ」という警告は、北朝鮮がミサイルを発射した直後の7月6日に北朝鮮の金桂冠外務次官によって国際社会に向けて発せられた言葉である(「時事通信」06年7月22日11時0分更新)。

(3) 北朝鮮が主導権を握った南北閣僚級会談

会談2日目の12日の午前の全体会議について、中央日報は「閣僚級会談のテーブルについた北朝鮮側権虎雄団長はテポドン2号発射の波紋にも何とも感じてないような態度だった。ミサイルに対して直接的な言及を避けながらもごり押しの北側論理を曲げなかった。核心は北朝鮮のミサイル、核開発のおかげで韓国も安全だという主張だった。それとともにコメ50万トンと軽工業原料提供要求まで出した。誰も同意することができない強引な主張を述べ、

必要なのはすべてもらってやるという意図がありありと見えた」とし、また「北朝鮮は国家保安法廃止など4つの要求事項を提示した。目に余るのは『体制と尊厳を象徴する聖地』に対する訪朝参拝許容要求だ。またコメ、肥料支援などは論議しないという政府の公言にもかかわらず北朝鮮はコメ50万トン(輸送費含む1,750億ウォン)借款提供を要請した。先月、経済協力推進委の際、鉄道試運転が行われれば送ることになっていた石炭、履き物など軽工業原資材(750億ウォン)もまた要求し、この問題に対する執着を見せた。それとともに北朝鮮は秋夕を契機に離散家族再会カードを出した。人道的問題である離散家族再会を条件化して対北支援を得るという考えだ」(「中央日報」06年7月13日9時53分)と報じていた。

また、朝鮮日報は「北朝鮮側はミサイル発射問題については言及を避け、的外れな要求を次々と突きつけた。北朝鮮側代表の権虎雄内閣責任参事は、国際情勢の変化に影響されることなく(2000年の)六・一五南北共同宣言の履行を通じてさまざまな障害を取り除いていこうと主張した。その一つ目の課題として、8月15日に平壤で行う(日本の支配からの)解放記念行事の際、韓国側代表団が『革命の聖地』を訪問するよう求めた。北朝鮮の『革命の聖地』とは、金日成主席の遺体が安置されている錦繡山記念宮殿、革命烈士陵、愛国烈士陵などを指す。北朝鮮側は『相手方の体制や尊厳を象徴する聖地や名所、参観施設などを制限なく訪問するべきだ』として、このような提案をした。北朝鮮代表団が昨年8月15日にソウルで行われた解放記念行事の際、国立顕忠院を訪問したのも、このような主張をするために先手を打ったものと考えられる。北朝鮮側は以前から参観施設についての制限撤廃を求めてきたが、今回はさらに具体的に、韓国代表団の『聖地』訪問まで提案してきた」[ミサイルを発射して緊張を高めておいて、韓国側に金日成主席の墓所の参拝まで要求してきた」(「朝鮮日報」06年7月13日10時30分)としていた。

このように、中央日報も朝鮮日報もミサイル発射問題に言及せず的外れな要求をしたと北朝鮮を批判しているが、それは韓国政府が「北朝鮮との会談」と「国際社会での面子」という二股をかけ、韓国政府が北朝鮮に「ミサイル

発射の謝罪に來い」と要求し、北朝鮮側代表団がやって來たものだから、中央日報も朝鮮日報も北朝鮮が「ミサイル発射の謝罪に來た」と勝手に思い込んでいたからで、「韓国人の自惚れ」がこのような勝手な思い込みをさせていたのである。

他方、南北閣僚級会談に関する韓国政府のマスコミ発表に関して、「非公開会談の内容を政府がどの線まで公開しているのかについて疑問が出ている。代表団は1時間30分の会談内容をマスコミにどう説明するかをめぐり1時間以上対策会議をした。政府が都合のいい情報だけ流すのではないかという懸念が出ている」(「中央日報」06年7月13日12時51分)と報じられていたが、それは韓国政府が「北朝鮮がミサイル発射の謝罪に來た」と勝手に思い込んでいたため北朝鮮側の発言に翻弄され、同時に韓国政府が北朝鮮の警告をうすうす感じ始めたからであろう。

Ⅲ 北朝鮮の「先軍政治恩徳論」と南北閣僚級会談の決裂

(1) 北朝鮮の「先軍政治恩徳論」に対する批判

北朝鮮の権虎雄内閣責任参事が「『先軍政治』は南側の安全を凶るものだ。南側の広範囲の大衆が先軍の恩を受けている」と発言したことに対して、韓国では与野党が一斉に批判の声を高め、与党開かれたウリ党の金權泰議長は「政府と国民を侮辱する常識以下の発言だ」「耳を疑わずにはいられないほど。発言を取り消し、韓国の国民に謝罪せよ」と非難し、同党では「呆れてものが言えない」「韓半島の平和を担保に無謀な挑発行為を続ける北朝鮮に対し、これ以上支援と譲歩を続けることはできない。南北関係を再点検すべきだ」との声が上がり、野党ハンナラ党も「容認できない妄言だ」と非難した。

権虎雄内閣責任参事の「先軍政治恩徳論」をめぐり、朝鮮日報は社説「『核とミサイルで韓国を守っている』という北朝鮮」で「権虎雄内閣責任参事は…『我々の先軍政治は韓国側の安全をも凶るもので、韓国側の多くの民衆が先軍の恩恵を受けている』と話した。権参事はまた、韓米合同軍事演習

の中止、国家保安法の撤廃などを要求し、50万トンのコメ借款と軽工業原料の援助を要請した。まるで、北朝鮮が核とミサイルで大韓民国政府と国民を保護してやっているのだから、その代価を払ってほしいと言わんばかりの内容だ」韓国は『(そのような主張は)論理に合わず、受け入れられないので、今後はそんな主張はしないでほしい』と北朝鮮に懇願した。すべてが北朝鮮の望むとおり、予測したとおり、仕組んだとおりに展開するのが、今の大韓民国の実情だ」(「朝鮮日報」06年7月13日7時49分)とし、「先軍政治恩徳論」を持ち出して警告した北朝鮮に反発しながらも、その警告を受け入れてしまいそうな韓国の実情を嘆いていた。この社説のとおり、北朝鮮の警告は盧武鉉大統領によって素直に受け入れられることになるのである。

また、中央日報は社説「核とミサイルで韓国を守るからコメを出せ」で、「驚かされたのは『北の先軍政治が韓国側の安全をはかる』と言ったことだ。それとともにコメ50万トン支援を要求してきた。『米国の侵攻に対立し、核とミサイルで、北はもちろん南も保護するから韓国側はその対価として支援をしる』と言うのだ。北側はミサイル発射という『正常軍事訓練』ができるが南側は軍事訓練してはいけないという強硬発言も同じだ。一言で韓国を『朝貢国』とみなすわけだ」(「北朝鮮がこんなに傲慢な態度を見せたのは『韓国側は眼中にもない』という意味だ。この政府は『対話の糸を切ってはいけない』という理由で今回の会談を強行した。しかし北朝鮮の意図に対しては何一つ知らないことを如実に表した。対北政策を原点から見直してほしい。ここまで脅迫されて思うがままにされる南北対話はこれ以上いらない」(「中央日報」06年7月13日8時14分)と、北朝鮮の態度に呆れるとともに盧武鉉大統領の対北朝鮮政策を厳しく非難していた。

中央日報の社説は、北朝鮮が「韓国を『朝貢国』と見なしている」としているが、この表現は「幼い弟」(韓国)を守るのが核保有国である「兄」(北朝鮮)の役割であると北朝鮮が考えていることや、韓国が北朝鮮を「幼い弟」と思い込んでいたのは自惚れに他ならないということを認識・自覚した上でこのことならば、的を射ているといえる。しかし、社説は続けて「こんなわけ

のわからないことを言われたのは、ある意味では予想されたことだった。大統領がすべての物質的、制度的支援をするといった支援ができなくてやきもきしていた。国際犯罪である偽造紙幣や悲惨な北朝鮮人権問題などでは北朝鮮をかばうために神経を使った。ひどいときはミサイルを発射しても北朝鮮より、日本を咎めることに力を入れている。金正日と首脳会談をしたくて気をもんだのか、それとも『理念的信条』のためかまったく理解不可能なことが起こっている」としていることから、社説は国際社会の現実や「韓国人の自惚れ」を理解・自覚していたわけではなく、単に盧武鉉大統領の失政の表皮的な結果と考えていたのであろう。

(2) 南北閣僚級会談の決裂

南北閣僚級会談の3日目の13日には、双方の首席代表と実務代表の協議など本格的な交渉に入り、午後5時ごろの終結会議開催を目指しているが、「前日の全体会議での基調発言や首席代表の接触では議題や立場の隔たりが歴然としており、交渉の難航が予想される。共同報道文が作成されるかは不透明な状況だ」(「YONHAP NEWS」06年7月13日9時9分更新)といわれていた。

この憶測は的中し、韓国統一部は13日昼に北朝鮮側が「予定を1日早めて13日中に帰国する」と韓国側に伝えてきたため、午後2時30分から終結会議を開いて会談を終えることを決めたと発表した。南北閣僚級会談は事実上決裂し、北朝鮮代表団は日程を1日早めて帰国することになった。韓国側の発表によれば、午前10時30分から首席代表会談が行われたが、「北朝鮮はコメ支援問題を主に取り上げたのに対し、韓国側はミサイル問題解決の糸口を見つけるまではコメ支援の協議には応じられないという従来立場で一貫した。ミサイル発射が招いた局面を打破するために、北朝鮮が6か国協議復帰を決断する必要があると韓国側は強調したが、北朝鮮はこれに明確な答えを示さなかった」「そのため、これ以上の話し合いは意味がないと判断した」という(「YONHAP NEWS」06年7月13日13時47分更新)。

なお、北朝鮮側代表団はミサイル発射問題と6か国協議復帰については

「南北間の(閣僚級会談)首席代表が決定することでも、中国の武大偉外務次官と北朝鮮の金桂寛外務次官が結論を出す問題でもない。北朝鮮の指導者が決定する問題だ」と述べたと報じられているが(「産経新聞」06年7月13日20時42分)、北朝鮮側にとっては当然の主張で、韓国側が「北朝鮮がミサイル発射の謝罪に来た」と勝手に思い込んでいたために議論がかみ合わず南北閣僚級会談の決裂という結果を招いてしまったのである。

終結会議で李鍾奭長官が「いろいろと残念な部分もあるが、互いに十分に意思を伝えた状態であるため、この時点で終わるのも構わないと思う」と述べたのに対し、樵虎雄内閣責任参事は「結実がないことは遺憾に思う。我々が会談日程を縮めたように、北と南の間も互いに和合団結する過程ももっと縮められればどれだけよいかと思う」と応えたという(「YONHAP NEWS」06年7月13日16時19分更新)。なお、次回の会談日程を決めることができないまま終結会議を終え、また南北閣僚級会談で共同報道文が発表されないのは2001年11月の第6回会談に次いで2回目、会談が決裂し日程を予定より早く切り上げるのは今回が初めてであった。

そして、終結会議の終了後に北朝鮮側は記者団に声明文を配布し、その中で北朝鮮は「南側は初めから(北朝鮮側と)違った考えを持ち、不純な目的を追求し、会談本来の使命に合致しない、閣僚級会談では扱うべきでない問題ばかり出してきて、我々の提案に対しては討論すら拒否した。閣僚級会談は決して軍事的な会談ではないし、6か国協議でもない。我々がこうして途中で帰ることになった責任はすべて韓国側にある」「我々は『民族同士』の理念に合わせ会談をやりあるものにしよう」と誠意と努力を尽くした」「南側はせっかく開かれた閣僚級会談を白紙化し、南北関係に予測できない破局的な結果が発生したことに、相応の代価を払うことになる。南北共同宣言の理念を捨て同族を敵対視し非理性的な態度で会談を白紙化した南側の行動は厳正に清算されるだろう」と警告していた(「YONHAP NEWS」06年7月13日16時14分更新)。

この北朝鮮側の警告に対して、東亜日報は「南北閣僚級会談を決裂させて

おきながら、北朝鮮代表団は『相応の対価を支払うだろう』と吐き捨てて、平壤に戻った。当然のように要求してきたコメ50万トンと軽工業原資材を提供しないことが分かると、『同じ民族』を叫んでいたその口で本音を吐いたのだ。盧武鉉政権と親北朝鮮左派勢力が、脱米、反米の旗を振って合唱してきた『民族協力』に対する報いがこのような悪口と侮辱だとは、金正日政権を『信奉する心』がまだ足りないためだと言うのか」と北朝鮮を厳しく批判していたが(「東亜日報」06年7月15日6時22分)、南北閣僚級会談決裂は二股をかけた盧武鉉大統領の愚かさと「韓国人の自惚れ」が招いた結果あった。

(3) 南北閣僚級会談決裂に対する評価とその批判

李寛世南北閣僚級会談韓国側報道官は会談終了後に「ミサイル問題への韓国や国際社会の憂慮と6か国協議への早期復帰の必要性を北朝鮮に詳しく説明した。このような立場は北朝鮮指導部に伝わったようだ」(「東亜日報」06年7月14日3時1分)と自画自賛していた。しかし、中央日報は社説「南北長官会談決裂、対北政策組み直しを」で、「政府の対北政策が限界を表した。政府内外の反対意見にもかかわらず強行した第19次南北閣僚級会談が北側の一方的撤収で決裂した。北代表団は強硬な対南非難声明を出し、日程を1日繰り上げて帰ってしまった。開いてはいけない会談だった。北朝鮮を説得するという意識がどれだけ弱かったかはっきりした。北朝鮮代表団は会談冒頭から先軍政治の話をしながらかつて挑発し、居直って反発、怒りをあらわにして帰っていった。今回の会談は北朝鮮が我々をどう見ているか如実に示した席となった」(「中央日報」06年7月14日9時7分)と、南北閣僚級会談を「開いてはいけない会談だった」とし、また「北朝鮮を説得するという意識がどれだけ弱かったかはっきりした」としているが、そもそも韓国政府に北朝鮮を説得するだけの力量はなく、あると思っているのであれば、それは北朝鮮を「幼い弟」と思い込んでいる「韓国人の自惚れ」以外の何ものでもない。

さらに、中央日報は「閣僚級会談史上初めて、北側代表団が日程を消化せずに帰ってしまった。次の会談の日程すら決められなかった」「北朝鮮は開

かれていた南北対話チャンネルさえも閉じてしまう態勢だ。政府は振り向いて去る北朝鮮を呼び止めなかった」「北朝鮮の妄言により国民のプライドが傷つけられた会談が、果たして適切だったのかという批判が飛び交っている」(「中央日報」06年7月14日10時31分)と報じていたが、中央日報がいう「国民のプライド」こそが北朝鮮を「幼い弟」と思い込んでいる「韓国人の自惚れ」に他ならないのである。

なお、南北閣僚級会談が決裂したことについて、朝日新聞は「北朝鮮が閣僚級会談の席を立ったのは、韓国からコメ支援を得るめどが立たなかったことが直接の原因とみられるが、北朝鮮代表団は韓国の説得を『不純な目的』とこきおろし、国際社会の批判に耳をふさいだ。また、『民族同士』の理念を捨て会談を霧散させた、と決裂の責任を韓国に押しつけ、『我々の進むべき道を進む』と主張してミサイルや核開発での対応に変化がないことを示唆した」(「asahi.com」06年7月14日7時53分)とし、毎日新聞は「会談の開催延期を求める韓国世論を押し切って『南北対話の継続』を維持したが、北朝鮮側はミサイル問題を話し合う姿勢すら見せず、南北ホットラインの影響力が失速した現状を示した形になった」(「毎日新聞」06年7月13日23時27分更新)と報じ、読売新聞も「北朝鮮が、日本などの進める国連安全保障理事会決議案に反対して外交的解決を主張していた韓国の説得まで聞き入れなかった」(「読売新聞」06年7月13日14時1分)としていたが、各紙は南北閣僚級会談で北朝鮮がミサイル発射を謝罪し、6か国協議に復帰することを約束するとも考えていたのであろうか。

そして、時事通信は「南北関係は当面、冷却局面に入る可能性も出てきた」(「時事通信」06年7月13日19時1分更新)とし、韓国の東亜日報も「しばらく南北関係は硬直する見通しだ。国際社会の対北朝鮮制裁の動きも相まって、北朝鮮の6か国協議への復帰も当分困難にみえる」(「東亜日報」06年7月14日3時1分)と報じていたが、南北関係はこのような懸念とはまったく逆の方向に急進展していくことになるのである。

IV 北朝鮮に謝罪する韓国政府

(1) 李鍾奭統一部長官への非難

YONHAP NEWSは「第19回南北閣僚級会談が13日に事実上決裂したことで、統一部の李鍾奭長官が危機に立たされている。北朝鮮のミサイル発射を受け、会談の開催が危ぶまれる中で開催にこぎ着けたが、これといった成果を出せずに早期決裂したためだ。次回会談の日程も決められなかったことから、対話のモメンタムを失うばかりではなく南北関係も急速に冷え込みかねないとの懸念の声も高まっている」「会談に先立ち政府の一部からも南北対話は先延ばしすべきとの声が上がったにもかかわらず、李長官が『対話の場を自ら閉じることはできない』と反対を押し切ったことも問題視されている」と伝えていた(「YONHAP NEWS」06年7月14日9時10分更新)。

また、李鍾奭長官が北朝鮮のミサイル発射問題を北朝鮮側に「サッカー選手は自分では危険なプレーをしなかったと思うこともある。しかし、相手チームの選手や審判、そして多くの観衆も危険だと思えば、危険なプレーをしたことになる」とサッカーの試合での判定に例えて述べたといわれ(「朝鮮日報」06年7月13日10時30分)、このような李鍾奭長官の発言や南北閣僚級会談での韓国側の対応に対して「断固として非難するという政府の約束とは違う」「権虎雄内閣責任惨事がコメ50万トンの支援を要求をしたことを非難しなかった」「北朝鮮が『先軍政治恩徳論』などごり押しをしたのに政府の対応戦略は十分でなかった」との批判の声が上がり(「中央日報」06年7月13日12時51分)、そのため朝鮮日報は「北朝鮮がいくら無礼な行動をとっても、公開の場で非難することすらできなかった。ただ北朝鮮側が会ってさえくれることにひたすら感謝するだけだ」「北朝鮮に対してここまで甘い態度を取ってきたからこそ、『韓国は金正日將軍様の恩恵にあずかっている』などという、厚顔無恥な要求がまたしても北朝鮮代表の口から堂々と出てきたのだ」(「朝鮮日報」06年7月14日11時50分)と、韓国側の対応を厳しく批判していた。

南北閣僚級会議を何度も開催してきた韓国政府が北朝鮮について知らない

わけがない。世宗研究所南北関係研究室の白鶴淳室長は「北朝鮮は南北閣僚級会談で核やミサイルの問題を議論する気はさらさらない」「北朝鮮の立場ではミサイル発射問題はあくまでも米国に対するカードであり、もともと韓国との議論は成り立たない」と指摘し、高麗大の南成旭教授は「外交と国防はそれぞれ所管部署が別であり、今回の代表団ではミサイルの話はできないというのが北朝鮮の立場だ」「韓国側がこうした事情を考慮すべきだった」といい、また世宗研究所の宋大晟専任研究委員は「今回会議に参加した北朝鮮代表団はせいぜいコメ支援、聖地訪問要請、先軍政治など、許可された議題についてだけ話すよう指示されていたはずだ」(「朝鮮日報」06年7月14日11時3分)と述べているが、これらの指摘はいずれも正しい。韓国政府も、こんなことを百も承知していたはずである。南北閣僚級会談の北朝鮮側の参加者はすでに分かっていたのである。にもかかわらず、韓国政府が南北閣僚級会談を強行したのは「北朝鮮との会談」と「国際社会での面子」という二股をかけても南北閣僚級会談を開くことができるという「アマチュア外交」の浅知恵と、北朝鮮は必ず謝罪に来ると思い込ませていた「韓国人の自惚れ」によるものといわねばならない。

このような李鍾奭長官への非難に対して韓国政府高官は「今回の会談の目標は韓国の考えを正確に北朝鮮の指導部に伝えることであって、対話のきっかけとするつもりはなかった。こういう状況は会談前から予想していた」と開き直っていた(「朝鮮日報」06年7月14日9時8分)。朝鮮日報は「北朝鮮に対して、韓国政府は一貫して『右の頬を打たれたら、左の頬も差し出せ』という対応を続けてきた」(「朝鮮日報」06年7月14日11時50分)と報じていたが、まさにその通りである。

(2) 南北閣僚級会談の意義を強弁する李鍾奭長官

韓国政府内では、何の成果もなく終わった南北閣僚級会談について「あのような会談をする必要があったのか」という問題が提起され、与野党も会談の結果をめぐって攻防を繰り広げていた。野党ハンナラ党の李季振広報担当

は「盧大統領は南北関係を悪化させた責任を取って国民に謝罪し、李長官は失敗が予見された閣僚級会談を強行した責任を負って直ちに辞任すべきだ」と主張したのに対して、与党開かれたウリ党の金權泰議長は「状況が重大かつ複雑な中で南北閣僚級会談を開催したのは良かった。対話をしなければ、94年の北朝鮮核危機の時のように私たちの役割は消え、解決の手段を失う」と南北閣僚級会談を評価した（「東亜日報」06年7月15日6時22分）。

矢面に立たされていた李鍾奭長官は7月14日の開かれたウリ党の拡大幹部会議で、「今回決裂した南北閣僚級会談はミサイル問題と関連し北朝鮮の6か国協議復帰を求め対話のモメンタムを維持することが目的だった」「対話への流れをそれなりに維持したと評価する」「会談中に北朝鮮側から強い反発があったものの、最も敏感なミサイル問題を閣僚級会談で初めて議題として扱い、韓国政府の立場を明確に伝えるなど最善を尽くした」と述べ、また李鍾奭長官は北朝鮮が強く要求するコメと肥料の支援については「今回の事態が解決するまでは応じられない」と明言したが、それは北朝鮮が6か国協議に復帰するまで同国に対する食糧支援を停止するということを意味していた。

さらに、李鍾奭長官は14日午後の国政定例会見で発表文を通じて、「早期終結を含む今回の会談の結果はすべて予想範囲内にあった」「憂慮されるからといって会談をしないとは言えなかった。会談を中止する方が楽であっても会談を開催しなければならないというのが政府の結論だった」と会談開催の意味を強調するとともに、「会談開催を決定したのは政府だ」として責任を転嫁し、さらに「にもかかわらず会談をなぜ行ったのかと問う人がいるなら、私は『代案は何か』『このような結果は予想されたことだったが、どうすれば良かったというのか』と問いたい」と反論し、「10の長官職よりも重要なのが韓半島の平和と安定であり、南北和解の動力を維持することだと考えて今回の会談に臨んだ。長官職にこだわっていたなら、難航が予想された今回の会談は回避しただろう」と、野党ハンナラ党から出ている辞任要求を拒否した。

他方、青瓦台の鄭泰浩報道官は14日午後の定例会見で、「北朝鮮のミサイ

ル発射と6か国協議復帰を主題に政府の立場を強く伝えるという方針を定め、その目的どおりに会談が進行された」「李鍾奭長官は韓国の立場を正確に伝達した」「政府の立場では意味ある会談だったと見ている」と南北閣僚級会談を評価し、北朝鮮側代表団が会談を予定より1日早く切り上げて帰国してしまったことについては「北朝鮮側のあらゆる姿勢と可能性を予想し、当初から想定していたことの一つ」(「YONHAP NEWS」06年7月14日16時28分更新)と述べたことに対し、中央日報は「閣僚級会談では北朝鮮代表団から『南北関係に破局的結果をもたらしたことに對し、民族の前に当然の代償を支払うことになるはずだ』という脅迫を受けたが、青瓦台は『意味ある会談だった』と自慰している」(「中央日報」06年7月15日10時30分)と青瓦台を批判していたが、問題は青瓦台が「意味ある会談だった」と言及したことは北朝鮮に対して謝罪し、北朝鮮の警告を素直に受け入れるという意志表明に他ならないのである。

(3) 安保問題に発展した南北閣僚級会談をめぐる評価

南北閣僚級会談の評価が大きく分かれ、与野党が火花を散らしている中で、与党開かれたウリ党所属の金元雄国会統一外交通商委員長は7月14日に「パーヴェル・ベル在韓米軍司令官は、北朝鮮が韓国を攻撃するためにスカッドやノドンミサイル800基以上を保有していると言っているが、北朝鮮は韓国を攻撃すると言ったこともなければ、北朝鮮のミサイルは韓国に向けられているわけでもない」「米国が先制攻撃を行った場合、北朝鮮が駐韓米軍基地を集中攻撃する可能性はある」が、「北朝鮮のミサイルはせいぜい数百基程度だ」と語り、この発言は南北閣僚級会談での基調演説で権虎雄内閣責任参事が「『先軍政治』は南側の安全を図るものだ。南側の広範囲の大衆が先軍の恩を受けている」と強弁したことを素直に受け入れたものであり、そのため金元雄国会統一外交通商委員長の発言によって南北閣僚級会談の評価問題は韓国の安全保障問題へと発展したのである。

朝鮮日報は社説「韓国の国会委員長は北朝鮮最高人民会議の委員長なのか」

で、「国政の最高責任者である盧武鉉大統領が、北朝鮮の核開発は自衛用という北朝鮮側の主張に一理があると発言したその流れが、行き着くところまで行った感がある。実際には北朝鮮は気分を害するたびに、『韓国を火の海にする』と脅しをかけてきた。ところが国会統一外交通商委員長という人物が、そんな話は聞いたことがないと主張している。北朝鮮に不利な話は自分の耳には入ってこないと言っているも同然だ」「韓半島で戦争が起きれば、北朝鮮が主に駐韓米軍基地を攻撃すると考えることはできるかもしれないが、米軍基地は外国にあるのではなく、韓国の中にある。全国が火の海になるのは間違いない。しかも金委員長は韓国防衛のために来ている同盟国の軍隊がミサイルの洗礼を受けようとも、それは自分たちとは関係ないことだと話している」「これこそまさに盧武鉉政権と政府与党の同盟観だ」「韓国国会の統一外交通商委員長による発言ではなく、北朝鮮の最高人民会議の委員長の発言ではないかと思わざるを得ない内容だ。しかし金委員長を外交通商委員長に就かせた人々が、彼がどういう人物なのかを知った上で選んだことは間違いない」(「朝鮮日報」06年7月15日10時33分)と、金元雄国会統一外交通商委員長の発言と盧武鉉政権の安全保障政策を批判した。

また、東亜日報は社説「国民に飛び込んでくる親北反米の請求書」で、「バーウェル・ベル在韓米軍司令官は昨日、『北朝鮮のノドンとスカッド・ミサイルは、韓国を狙ったものだ』と明らかにした。にもかかわらず、与党所属の金元雄国会統一外交通商委員長は『北朝鮮は自衛手段だと言っている』『(米国が)過剰反応している』と寝言のようなことを言っている。北朝鮮がともすると発する『ソウル火の海論』も、自衛のためだと言うのだろうか」とし、盧武鉉政権が2005年を「米軍撤収元年」と宣布し、2012年を目標にした戦時作戦統制権の還収はスムーズに実現しつつあるが、「独自の情報監視能力すらない状態で、『自主』という名分のもとに推し進める作戦権還収は、韓国国民を今よりも深刻な北朝鮮の軍事的脅威にさらすだろう」「まさに金正日政権と国内親北朝鮮左派勢力が狙うとおりだ」(「東亜日報」06年7月15日6時22分)と、北朝鮮の「先軍政治恩徳論」を受け入れている国内親北朝

鮮左派勢力つまり盧武鉉政権を批判した。

そして、中央日報は社説「青瓦台・内閣外交安保チームが責任を取るべき」で、「今までの政府外交安保チームの対処は適切だったのか。総体的な失敗と評価せざるをえない」「北朝鮮は『ハンナラ党が執権すれば戦争の炎に包まれるだろう』という脅迫に続き、ミサイルを発射しておきながら我々に向かって『代価を支払うことになるだろう』と怒鳴って帰った。ここまできると、外交安保チームがなぜ存在するのかという根本的な質問をしなければならぬ。青瓦台参謀として、該当省庁の責任者として、責任は免れない。青瓦台・内閣の外交安保チーム全員を更迭しなければならない」(「中央日報」06年7月15日10時30分)との主張を展開したが、盧武鉉政権はすでに「先軍政治恩徳論」信者となり、金正日に忠誠を誓うことを公言しているため、中央日報の社説が主張する責任を盧武鉉大統領がとることはない。

おわりに

盧武鉉大統領が外交通商部や国防部の「南北閣僚級会談は中止すべきだ」「南北閣僚級会談は延期すべきだ」との声を無視して開催決行を指示したのは、盧武鉉大統領が南北の「民族和解」の実現を究極の目標としているからである。にもかかわらず、韓国政府が南北閣僚級会談に先立って「我々は北朝鮮ミサイル発射問題を強く非難し、6か国協議復帰を促す」「今回の会談でコメの提供や経済協力問題は扱わない」と表明したのは、南北閣僚級会談を延期せよという批判を意識し、「北朝鮮との会談」と「国際社会での面子」という二股をかけたからで、この浅知恵こそ「アマチュア外交」と「韓国人の自惚れ」を如実に表していたのである。そして、このような韓国政府の表明は会談を開くから北朝鮮に「ミサイル発射の謝罪に來い」と要求するものであり、このような韓国の傲慢で驕った態度に北朝鮮は警告を発するために会談にやって来たのである。

北朝鮮側に「ミサイルの発射の謝罪に來い」と韓国側が要求したのは、韓

国が北朝鮮を「幼い弟」と思い込んでいるからであるが、北朝鮮の金桂冠外務次官が「我々は幼い弟ではない。核保有国だ」と言明したように、現実の国際社会ではミサイルで中国を恫喝している北朝鮮にとっては韓国こそ「幼い弟」であり、「幼い弟が我々に指図するな」という警告が「予定した最終日を迎える前に帰国した」ことであり、帰国前に北朝鮮側が出した「南側は南北関係に予測できない破局的な結果が発生したことに相応の代価を払うことになる」「南北共同宣言の理念を捨て同族を敵対視し非理性的な態度で会談を白紙化した南側の行動は厳正に清算されるだろう」という声明であったのである。そして、韓国に北朝鮮を「幼い弟」と思い込ませているものは、北朝鮮よりも韓国の経済発展が進んでいるという現実や、北朝鮮では「食糧不足に悩む庶民は韓国や国際機構からの支援物資で食いつないでいる」(「朝鮮日報」06年7月14日11時50分)という実態から生まれる優越感に基づく「韓国人の自惚れ」であり、そうした「韓国人の自惚れと驕り」を助長してきたものの一つに日本の「謝罪外交」「土下座外交」があることはいままでもない。